

義務教育段階での学力

私が所属している日本学校教育学会の第27回研究大会の公開シンポジウムで、有馬朗人（武蔵学園長、元文相）が基調講演を行っていた。演題は「グローバル時代における「生きる力」とは」である。

その中で、義務教育段階での学力についての話があった。

（以下要旨）

- ・ 知識についての学力に比べて、応用力や自ら考える力が弱いことが、30年前から指摘されてきた。（応用力を高めるため総合的な学習の時間を導入したが、一方、他教科の時数が減り、学力低下論に結びついた。）
- ・ 1993年、2001年、2003年の文部省学力調査…ゆとり教育に入る直前とゆとり教育以後の成績比較
理科は、ゆとり教育以後の方が高い
- ・ 国立教育政策研究所の千々布氏の調査
 - ①昭和37年、39年の調査と平成19年、20年の調査における共通問題15題
→すべて上昇
 - ②平成以後の調査も合わせた共通問題33題
→ほとんど上昇
 - ③昭和時代の調査も含めた共通問題48題
→39題が上昇
- ・ 日本の先生はよくやっている。胸を張ってほしい。
- ・ 基礎、基本の知識は上がっている。理由は高校進学率の上昇。
- ・ 全国学力・学習状況調査…応用に関する正答率が、知識に関する正答率に比べ10%低い。
- ・ **課題**…高校全入時代の中学生の学力を保つためにはどうする必要があるのか。
→本来の意味での学問のおもしろさを教えないといけない。
総合的な学習の時間で応用力（生きる力）の育成を目指している。

（以下鳴記）

私の世代は、総合的な学習の時間が導入され、カリキュラムを開発してきた。かつて、総合専科担任になりたかった。それだけ魅力があった（ある）。しかし、現実には、学校で学ぶ内容を総合の目標と一致させていろいろなことを学ぶ忙しい時間になり、学びの深まりがあったか「？」である。好きなことを言わせてもらおうと、総合的な学習の時間に、目的別のクラス編成をする必要があるのかもしれない。